

〈論文〉

日本における南アメリカ認識の形成

——16世紀～江戸末期——

大 平 秀 一

I はじめに

たとえ個であれ集団あるいは何らかのカテゴリー・地域であれ、人間は自己内部においてのみ完結的に存在しているものではない。周囲を取り巻く他者の存在によって自己の形成・構築・再構築がなされ、またその場の性質・様態・状況が方向づけられ、その自己が相互かつ重層的にリンクし合って人間社会は構成されている。こうした状況下においては、自己による他者の位置づけあるいは捉え方が極めて大きな意味合いをもつ。基本的に、この点に意義を見出し、他者認識あるいは他者表象をめぐる研究は進められてきた。グローバル化現象が加速度的に拡大している現代において、このテーマの重要性は高まっており、情報獲得から認識へのプロセス、そして認識内容の作用をめぐる諸問題に基盤をおきながら、政治性や歴史性などに着眼した研究が進められている。

本論の考察領域は、日本における南アメリカ認識史である。ミクロなレベルでは、17世紀初頭においてすでに両地域の接触がなされているとはいえ、その規模と継承性より、直接的接触・関係のはじまりは明治期以後に位置づけられるのが一般的である¹⁾。しかしながら、これが日本における南アメリカ情報の移入あるいは同地域の認識・イメージ形成の開始と同意義というわけではない。日本における南アメリカ情報の存在は、16世紀末

に日本人によって製作された「南蛮系世界図」と称される世界地図上においてすでに確認できる。この地図の分析を通し、初期段階において、ヨーロッパと同質の南アメリカ認識・イメージ形成が日本でなされはじめていることがこれまでに指摘されている（大平1995；1996）。本論の目的は、これを基点として、日本が近代国家として形を整え、新たな「世界」の諸地域と直接的に関連していく明治維新以前に焦点をあて、日本における南アメリカ情報の流れを概観し、同地域の認識あるいはイメージをめぐる諸特徴を提示することである。

新世界認識の研究は、これまで同地域の「発見」・植民地化・統治をし、歴史的に密接な関連を維持してきたヨーロッパを対象として行われてきた²⁾。同テーマをめぐる研究史の中に、本論の意義を位置づけるならば、直接的接触・関連を持ち合わせていなかった日本とラテンアメリカという二地域間を分析の対象としていることにある。

II 初期段階における情報の特徴

今のところ、初期段階において日本に移入された南アメリカ地域の情報を具体的に示す文書は確認されていない。その情報内容を探り得る資料は、16世紀末期から江戸時代初期（およそ1640年代）にかけて、日本人によって製作された「南蛮系世界図」（以後「世界図」と略記）という、屏風の形態をとった手書きの世界地図に限定される。「世界図」は約30例が知られており、中には地図と共に民族図が付されている場合もある。上述した通り、「世界図」の分析はすでになされているが、最初に注目される情報内容を再確認しておくこととする。

まず、最大で42の民族が示された民族図の中には、新世界と関連する図が3つ描かれている。これらは、ブラジル、長人（パタゴニア）、そしてアメリカを表象した図である。ブラジルの図には、一貫してカニバリズムと関連した光景が示されており、中には「此の國の人、房屋を作らず、地を開きて穴と為し、以て居す。人肉を食するを好み、男を食らいて、女を

食らわず。鳥の毛を織りて衣と為す」と図中に注記を付したのも認められる(図1)。こうしたブラジルの情報は、トゥピナンバの村に10カ月滞在したとされるドイツ人、ハンス・シュターデンが16世紀半ばに著わした記録以後、当時のヨーロッパで関心をあつめたブラジルにおける食人の慣習を示したものにほかならない。ヨーロッパにおけるブラジルの表象と対比して考えると、微細にわたる情報までが移入されていたことが想定される³⁾。次に「長人」の図は、すべてが他の民族より大きく描かれている。地図中で、パタゴニアの地名に「即ち長人の国」と付記されたものがあることから、この図がパタゴニアの巨人であることがわかる(図2)。パタゴニアの巨人は、ヨーロッパの人々が新世界に住ませた代表的な化物で、マゼランによる目撃以後、18世紀まで表象され続けている。「世界図」中には巨人のサイズが示されており、一丈二尺(約3.6メートル)と示されているのが一般的で、中には「大は一丈四尺四寸、小は一丈尺」と記しているものもある。残りの1点「アメリカ」は、ヨーロッパにおいてアメリカのシンボルとして捉えられていた、弓矢、羽毛、裸体という要素と共に描かれている(図3)。これらの要素の一部は、ブラジルや長人の図と注記にも明瞭に認められる。

一方地図の中には、1596年のウォルター・ローリーの報告(Raleigh 1898)によって一躍名を馳せた幻のエル・ドラードの地、ギアナ帝国の都マノアならびにパリマ湖が赤道上に一際大きく描かれており、「きあか」(ギアナ)あるいは「把利黙湖」などと表現されている(図4)。これとは別に、大陸中央部にも、モホヤパイティティといった黄金郷の都市と関連した湖も描かれており、これにはヨーロッパの地図には認められない「金魚湖」という黄金と関連した独自の名称が付されている⁴⁾。これにより、ヨーロッパの人々が新世界に妄想した黄金郷をめぐる情報も伝わっていたことが想定される。南アメリカにおける異様な富の存在が意識されていたことは、「ペルー」という地名に「此国より銀出る」という注記が付されていることから窺われる。



図1 「世界図」のブラジル人
(南蛮文化館所蔵) 筆者撮影



図2 「世界図」の「長人 (パタゴニア)」
(南蛮文化館所蔵) 筆者撮影



図3 「世界図」の「あめりか」
(南蛮文化館所蔵) 筆者撮影

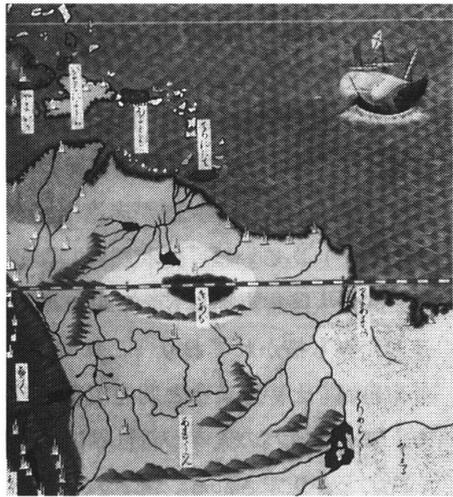


図4 「世界図」に示された黄金郷の湖
(織田・室賀・海野 1975: 47図より)

タブーの侵犯（カニバリズム）、化物の存在、異様な富の存在は、「発見」が既存の世界概念を破るものであったこと、出現の唐突さ、そして著しい文化的相違などから生じた、アメリカの未知性、新奇さ、異様さ、さらには人間性の等質性に疑問がもたれるほど強い他者意識のもとで、ヨーロッパの人々によって発明された典型的な「怪しいアメリカ像」である。「世界図」の中に強調的に表現されている情報をみると、ヨーロッパの文化的フィルターを通してのみ発明し得る内容が、基本的に大きく変化することなく日本人によって描かれていることが明らかである。しかも、註の内容、民族図の描写にやや立体感が失われて和風の要素が混在していることなどに加えて、キリスト教の施設と関連した「世界図」の製作・使用をめぐる状況を考慮すれば、示された情報は単純に模写・翻訳したものではなく、当時の日本人によって理解・認識されていたものと判断される（大平1995；1996）。

17世紀になって、幕府は世界情報の提供者であったキリスト教の勢力を徹底的に弾圧し、禁教令（1613）を敷き、その政策の一環として禁書令（1630）を公布してヨーロッパのあらゆる書物の輸入を禁止する。1635年になるといわゆる鎖国の状態におかれ、長崎の出島における中国・オランダとの経済的接点を除き、諸地域との直接的接触が不可能となる。しかしこうした状況が、世界に関する知識欲を減少させたわけではなかった。既存の情報、中国やオランダを通して得られた情報などを通し、アメリカ地域も含めた世界に関する知識は、その後拡大していくのである。

Ⅲ 「万国総図」：極端に和風化された南アメリカ表象

「世界図」以後の状況は、1645年以後に製作されていく「万国総図」を通してみることができる。これは、日本ではじめて刊行された木版画の地図で、基本的に掛け軸の形をとっており、向かって左側を北にした世界地図を描いたものと、計40の民族を描いた民族図が、一つのセットになっていたものである。作者は不明だが、1645年にはすでに製作されており、以



図5 万国総図の「あめりか」(上)と「ブラジル」(下)
(織田・室賀・海野 1975: 61図より)



図6 万国総図の「長人」
(織田・室賀・海野 1975: 61図より)

後18世紀初頭まで版を重ねている。民族図の上部には、世界の地域・人間の多様性が述べられており、当時の日本における世界に対する多大な関心を見てとることができる。

「万国総図」に示された南アメリカ大陸には、版により若干の相違があるとはいえ、14~20程度の地名が示されており、その中には「キアナ」(ギアナ)、「ハリヤ」(パリマ)など、黄金郷と関連した名称も含んでいる。またすべての図において、ペルーに「金山有」という注記が付されており、「世界図」で説明されていた「銀」が「金」に変化している。さらに、「長人」(パタゴニア)の地名は、南米大陸南端に隣接して示された南方の大陸の一部あるいは島に置かれるようになってい。一方、民族図には、やはり「ブラジル」、「長人」、「アメリカ」が描かれている。これらは、図5~6に示したとおり、基本的に構図は「世界図」に付されたものと同質だが、陰影法をはじめとする西洋の肖像画の諸特徴が損なわれ、極端に和風化の進んだ図となっている。やはりカニバリズムが表象された「ブラジル」には、前述したものと同質の注記が付されてい

るが、「産時、男の腹痛み、女痛まず」という情報が加えられており、「世界図」で説明されていた野蛮性、食人の慣習の存在に加えて、通常の間人と逆の状態という意味において非人間性あるいは怪異性が説明されている⁵⁾。また、大きく描かれている「長人」にも、16世紀末期から一般的だった「一丈二尺」というサイズに、文字をもたないという注記が新たに加えられている。「アメリカ」の図に関しては、「世界図」と同様の特質を維持している。これらの図は印刷後に着色されており、「アメリカ」と「ブラジル」は、黒色系に肌の色を示しているのが一般的である。

以上のような状況から、「世界図」以後も情報の多様化がなされながら、同質のアメリカ像が継承されていったことが明らかである。民族図が極端に和風化され、西洋製の図を模写した痕跡が認められないことは、南アメリカに関する知識が一部の日本人に浸透していたことを示唆している。「万国総図」は、製作当初、測量術、航海術などの学習用の白地図であったことが指摘されており⁶⁾、民族図と組み合わせて地名を埋めるためには、食人=ブラジル、巨人=パタゴニア、裸体・羽毛・弓矢=アメリカ、黄金=ペルーとする知識を持ち合わせておく必要があったといえる。1652年以後には、この模倣版も製作されて、一般社会にも流布しており、後の書物や地図にも多大な影響を及ぼしている⁷⁾。たとえば、図説国史年表ともいえる『年代記新絵抄』(1711)に引用された民族図をみると、ブラジルが他の民族より一際大きくしかも図の中央部に示されており、注目されていた状況がわかる⁸⁾。現段階において、注目を集めた理由は不明瞭だが、おそらくその怪異性によるものと考えられる⁹⁾。この他、後述する新井白石も、オランダ人から聞き取りを行う際、「万国総図」を資料として使用している。

IV 『増補華夷通商考』：最初の体系的記述

18世紀を迎える頃、日本人の手によって世界の地誌をまとめた書物が京都で刊行される。西川如見(1648~1724)の『華夷通商考』(1694)であ

る。この書物は、刊行当初上下2巻からなり、アメリカに関する情報は含まれていない。しかしその14年後、如見は『増補華夷通商考』（1708）を出版し、地図や図を加えて5巻に編集し直し、日本史上はじめてまとめられたアメリカ情報がそこに加えられている。この書物に付された地図中の南アメリカ大陸を見ると、「ハラシイル・食人国」、「ペルウ」、「長人国」、「銀川」（ラ・プラタ河）という5つの地名・注記・河川名が示されているにすぎない。「世界図」からの連続性を考察すると、ブラジル、ペルー、パタゴニアが南アメリカの主要構成地域と捉えられていたと判断してよいだろう。ただし記述の中には、この3地域に「キンカスラ」（カステイリヤ・デ・オーロ）も加えられている。各地域は、以下のように記述されている（西川1944：183-186）。

ペルウ国（ペルー）「大国にて熱国なり。人間の風俗最も賤し。土地肥饒にして草木五穀総て上品なり。鳥獸の美毛なる甚多し。土地金銀多しとぞ。此属類の数国あり。何れも雨ふる事無国也。地中には自然に潤沢の氣有て水万物を滋すと云。又、油膏江河より湧出す。是を燈とす。又是を以て舟を塗り屋を塗て漆と異なる事なし。又、バルサマと云油あり。樹の脂也。其香甚つよし。金瘡に妙なり。或は死人の屍體に塗て葬るときは千年にても朽ずと云。但紅毛の持来る者は又別国より出る者か。其説不同あり。又此国は土を掘て薪とす。山野平地皆此土ありとぞ。此国地震甚多く、所々山崩れ河塞ること多く、或は地陥り山湧出するの類最多し。此故に家屋を大に造る事為ず。惟国王の宮殿金銀彫めて甚美なり。一国文字なし。縄を結んで事を識す。人の性正直質素に、貪り吝ることなし。只地に毒蛇多し。故に網を張り其上に臥す。又此国には鉄なし。武具は皆木を焼き或は石を磨て造れりと云。又此国の詞は唐土の言語の如くに韻律にて謂詞也とぞ。此外世界万国の詞は皆音訓の詞にて韻律の詞には非ずとぞ。日本よりは海上八千余里」。

ハラジイル（ブラジル）「大国なり。北の方は大熱国にて、南の方は四

季正き国也。此国は人の寿命長き国にて疾病無しと云。他国の病氣ある者、此国に来れば必ず癒なほるとぞ。如何さま水土の妙ならん。其地氣最も厚く、奇異の鳥獸多く、人能よく弓を射る。人物男子は多是裸にて女子は常に乱髪にて、身を蔽おおへり。国米麦なし。草の根を晒し乾し粉にして餅に作りて朝夕の食とす。国主なく文字なし。好んで人の肉を喰ふ。大鳥大獸多し。又此国の虎は餓うえたるときは百人にても捕ふる事能あたわずと云ども、食に飽たるときは一人にて之を捕と云。土産蘇木甚多く、嘉木色々多し。白砂糖あり。又此国の南に銀河あり。時有て河水湧出て平地あふに溢る。後に水退て其跡を見れば皆銀砂銀粒有て地に敷けりと云。此河の広さ、海に入の廻めぐりにて幅十六七里也。其水海中に流れ入て七八十里程の間は、銀水一派浮んで潮水交ずにして分明也とぞ。是世界第一の大河なりと云。其水源には大湖ありて大河三つあり。銀河に至て合て一脈となれり。遠流一千里なる由。

チイカ(チリ)「長人国の総名也。パタウンなど云国も皆チイカ国の属類也。此国は人の長一丈程にて、遍身毛あり。好んで弓を射る。矢の長さ六尺。男女共に其面を五色に色彩を風俗とす。人之長一丈より甚高きも有りとぞ。先年紅毛船東方の大海を通りし時、屍の長一丈三尺なるもの浮み流るるを得たり。本国の人に語るが為とさざりに其肉を解去て其骨ばかりを全體ぜんたい取て帰りしと云り。其齒そのは三指を並べたる広さありしと云。即此国の人の没死したる者ならんとぞ。他国の船此国に行ときは殺す。故に紅毛人も往ずと云。七八十年已前、長崎町人に濱田某それと云者あり。若年の此蛮舶に寄て天竺諸国を廻りしに其船或時水渴あひに遇て、長人国の海辺に船を着て水を取んとするに、長人共弓を持て是を追い来りしかば、急に船を出して逃たりと濱田氏が物語ありし由聞伝ふ。此国は南の寒国也とぞ。此国の辺は皆日本の東南に当りて、海上七八千里或は一万里の規なりと云。南極の地を出る事四十度内外の国也」。

キンカスラ(カスティーリャ・デ・オーロ)「熱国なり。赤道の北にあり。此国世界第一金銀多き国也と云。此故に諸方の国々より通じて交易す。此国金銀を以て錢を鑄て遣ふ。金銀大小数種あり。其第一大なる錢、量目

百目（375グラム）、中なる者五十目（187.5グラム）二十目（75グラム）、小なる者十^{もんめ}匁（37.5グラム）とす。銀錢も五等あり。小さき者五分（1.9グラム）より、段々に八匁（30グラム）を大錢とす。都て此国の金銀甚多^{すべ}き故に諸物の値貴^{たか}しと云り。国主在て仕置ある由」。

まず、ペルーに関する記述をみると、前時代までの地図上にも示されてきた、金銀の豊かな様が2箇所において明記されている。風俗が卑しいと述べられている一方で、正直質素とされている背景には、バリヤドリ論争に代表されるような、アメリカ先住民の善悪あるいは優劣をめぐる二極的捉え方が影響しているものと考えられる¹⁰⁾。韻律による言語は、ヨーロッパの人々が他者の領域にもたせた文化要素の一つであるが、如見が「中国の言語のように」と語っている部分より、得た情報が単純に移行したのではなく、既存の知識を駆使して理解しようとしている様子が窺われる。前述した羽毛などと同様にヨーロッパにおける新世界シンボルの一つであったハンモックに関しても同様で、毒蛇が多いから使用すると論理性をもって捉えようとしている。「バルサマ」（バルサム）という樹脂に関して述べられているのは、如見自身も一部触れているように、当時の日本において、妙薬としてオランダから輸入されたエジプトのミイラが大流行しており、大きな関心が寄せられていたためであろう¹¹⁾。

次にブラジルに関する記述では、奇異の鳥獸、弓矢、裸体、食人といったヨーロッパにおける典型的ブラジル（あるいはアメリカ）イメージが記されていることをまず確認したい。「長寿の国」は、ヘロドトス以後、ヨーロッパの人々が他者の領域に住ませた奇怪な人間の一つである。さらに、ラ・プラタ河の記述より、富の存在が強く意識されていることがわかる。如見が水源としている湖は「世界図」で「金魚湖」と示されていた湖であることも指摘しておく。チリに関しては、パタゴニアの巨人の領域と同一視されており、全身に毛が生え、弓を使用し、顔に色を塗っているという、新たな情報が認められるほか、実際に巨人の骨を捕獲したオラン

ダの逸話、日本人で同地域に航海した経験のある者の逸話が具体性を持って記述されている¹²⁾。パナマのダリエンを中心とし、著名なエル・ドラードの舞台であったコロンビアをその領域の一部に含むカステイーリャ・デ・オーロは、富の記述に終始している状態である。当時の日本の度量衡に換算して貨幣の重さを考察していることから、富の実状を現実的に把握しようとしていることがわかる。

チリを除く地域を暑いとする記述に関しては、発見当初における新世界の位置づけにはもちろん、ビュフォンの人種論にまで影響を及ぼした、ギリシャ古典思想とキリスト教の概念が交錯したヨーロッパの複雑な世界概念が影響していると判断してよいだろう¹³⁾。いずれにせよ、この書物の中で、アメリカはアジア北方領域、中近東、アフリカ地域等と共に第5巻目を構成しており、巻頭部分で、これらの国(の人々)はすべて野蛮で、日本に來たことがなく、オランダ人の説話によって著したと記されていることから¹⁴⁾、アメリカを野蛮な地域と考えていたことが明らかである。如見の書物は、寺島良安の『和漢三才図絵』(1713)や後述する『西洋紀聞』など、後の多くの地理・地誌関係の書物に影響を与えていることが知られている。如見は、『四十二国人物図説』(1714)も著しているが、これについては山村才助が訂正版を出しているので後述する。

V 新井白石の著作と「長人論」

如見とほぼ時を同じくして、儒学者であり、その知識で培われた思想をもって幕政にも携わった新井白石(1657~1725)も、多くの地理・地誌関係の書物を著わしている。その中で、極めて限定的な容量とはいえ、体系付けてアメリカ地域の記述を行っているものが、オランダ人から得た情報、諸地理書、ヨハン・ブラウの地図、マテオ・リッチの地図等を通して得た知識をまとめた『采覧異言』(1713)と、屋久島に潜入したイタリア人宣教師ジョヴァンニ・バプティスタ・シドチを江戸に連行して尋問した内容を基盤とする『西洋紀聞』(1715)である¹⁵⁾。前者は全5巻に分かれてお

り、「巻第四」が「ソイデアメリカ」（南アメリカ）にあてられている。容量は少ないが、最初に位置と大陸の形状が説明された後、ブラシリア（ブラジル）、パタゴラス（パタゴニア）、ギリ（チリ）、ペイル（ペルー）、アロワカス（カラカス）、カステイラ・デル・ラゴ（カスティーリャ・デ・オーロ）、ホホヤナ（ポパヤン）、ニカラアグワ（ニカラグア）、ボンテイラス（ホンデュラス）、ルカタン（ユカタン）、ウワテマラ（グアテマラ）の項目が設けられ¹⁶⁾、各地の記述がなされている（新井1906：848-851）。ただし、チリ、カラカスそしてポパヤン以下の項目に関しては、名称の漢字表記と地理的位置関係が1行程度で説明されているにすぎない。

まず、ブラジルの項目を見ると、「世界図」に示された注記と同質の記述が認められ、肌の色が黒いこと、ハンモックで寝ること、その製作・使用方法が新たに加えられている。如見の記述と対比してみると、ハンモックの利用がペルーから移行している。また本文中に入れられた注書き部分に、「西図を考えるに、断肢して體からだを分かつ」とあり、ブラウの地図中に示されている食人の図を観察して、その状況を具体的に思考していたことがわかる。ペルーに関しては、肥沃な地であること、如見と同様に、遺骸に塗ると腐食しない樹脂バルサムを産出すること、そしてエミューが生息することとその特徴が述べられているにすぎない。オーストラリアに生息する走鳥エミューがペルーに住まわされている背景には、当時まだ探検が進んでおらず、不明瞭だった南方の大陸と南アメリカの情報が交錯しているためであろう。カスティーリャ・デ・オーロでは、「……白銀を産す（地はタリエンと名く。西人は皆、此地銀を産するを説く。図説に云く。多く金銀を産す。未だ孰くわしく是を知らず）」とあり、銀を産するのか金も産するのか不明瞭だと述べられている。いずれにせよ、漢字表記を説明した南アメリカ地域の冒頭の記述においても、「産する所、金銀の甚だ多きを以つて名を為す」と記されていることから、同地域の富に関して、白石が検討を加えていることがわかる¹⁷⁾。パタゴニアに関しては、如見と同様の長人に関する基礎情報に加え、マゼランによって発見されたことが現実的

イメージを思考しながら具体的に記述されている。さらに注目されるのは、儒学者だけあって、四書五経などから得た知識をもって、長人論を展開していることである。

白石は、孔子の『論語』を基盤として『洪範五行伝』『馬氏通考』『魏志東夷伝』などの記述を引用して、古代中国、朝鮮（新羅、高句麗）における長人の具体例を挙げ、証明しきれないことを理由にその存在に疑念を呈している。しかしその後、南部藩士が語ることとして、「寛文の初めに、漁師が網で腕を採った。人々が見て、肩を並べてその上に8人立てた。一人が、その指の骨を見ると、一関節の長さが四寸（12センチメートル）あった。一般的に人の指の長さが四寸なのだから、その人間の身長は二丈四尺（7.3メートル）ほどになる。ブラウの地図によれば、日本とパタゴニアの距離は2万5千里で、その間に陸がなく、その長人が漂着してもおかしくはない」（要約）と述べている。この「長人論」は、当時の日本において、巨人の存在を受容し得る受け皿が既に存在していたことを示していると同時に、パタゴニアにおける巨人の存在を確固たるものとしている。『采覧異言』は、当時の知識人を中心に広く読まれていたこともあり、南部藩士の物語は、大阪蘭学の草分け的存在だった橋本宗吉による『啁蘭新訳地球全図』（1796）の中でも記述されている¹⁸⁾。

『西洋紀聞』では、各地域の地誌が中巻で扱われており、南アメリカの記述は、「ソイデ・アメリカ諸国」としてブラジル、パタゴニア、ペルーが短くまとめられている（新井1906：770-771）。内容は、基本的に『采覧異言』と同質である。この書物は、キリシタン関係の情報を含むために禁書の一つとされ、1793年に幕府に献上された以外は明治15年に刊行されるまで社会に流布しなかったが、一部の識者には読まれていた。さらに白石は、『外国之事調書』（1712）の中で、前述した『万国総図』の民族図を見ながらオランダ人から聞き書きしている様子を記しており、アメリカ地域に関しては、「右の隅の上は夏をかきし也。かた（肩）ぬぎてあるも熱風の体をうつせし也…」とあり（図5）、裸体の状態にある理由を暑さに

求め、論理性をもって理解しようとしていたことがわかる¹⁹⁾。

如見や白石の書物が著された前後から19世紀にいたるまでも、多くの地図類が日本人によって製作されている。これらの中にも、黄金郷の湖、「食人国」、「長人国」が一貫して示されつづけている。

VI 山村才助：詳細な世界情報の提示者

19世紀にいたると、水戸の蘭学者山村才助によって、詳細な世界地誌がまとめられていく。才助の著書の中で、体系的にアメリカ地域の記述がなされているのは、『訂正四十二国人物図説』（1801）と『訂正増訳采覧異言』（1802）である²⁰⁾。前者は巻物の形態をとり、各地域の民族の絵を描いて、その右側に説明書きを加えたものである。この巻物は、仙台の蘭学者大槻玄沢が、前述した如見の『四十二国人物図説』の写本を目にし、図に関しては他の資料と一致するものの、説明は化物を扱っている『和漢三才図絵』と同質なので見るべきではないと批判し、門下の才助の知識を信頼して改めさせたものである。アメリカ地域で取り上げられているのは、アマゾン、ブラジル、パタゴニアである²¹⁾（図7～図9）。

まずアマゾンを見ると、他の民族の図において少なくとも一對の男女が描かれているのに対し、女性のみが天女のように描かれている。図の説明では触れられていないが、後述する『訂正増訳采覧異言』にその情報が明記されていることから、ヨーロッパにおいて、ギリシャ以後一貫して語られてきた女族のイメージが移入されていることは明らかである。記述をみると、「阿勒恋（アマゾン）は……土地広大にして、その人物風俗、一ならず。およそ、150余种あり。故にその人性、善良にして和愛、親睦なるあり。あるいは、その地、荒曠にして、その人俗、野卑、強暴なるもあり。大抵、今に至っても、なお多くは、邪魔を崇拜す……」とあり、善悪の両側面を兼ね備えたアマゾン地域の人々の多様さが示されているほか、「邪魔」が信仰の対象とされている。いわば、キリスト教における偶像崇拜が、キリシタンでもなかった才助にも、正理から外れたものとして理解されて

可憐思河名コレ此名明人ノ譯トシテ此大河ノ本名亞
 馬遜河也其地極遠南亞利加洲ノ大國ニ其地大ニ
 名ク其地極遠南亞利加洲ノ大國ニ其地大ニ
 和食甚多ク其地極遠南亞利加洲ノ大國ニ其地大ニ
 推テ其地極遠南亞利加洲ノ大國ニ其地大ニ
 小此等ナリ



図7 『訂正四十二国人物図説』のアマゾンの人 (山村：1801より)

作此圖此等名コレノ地極遠南亞利加洲ノ大國ニ其地大ニ
 名ク其地極遠南亞利加洲ノ大國ニ其地大ニ
 和食甚多ク其地極遠南亞利加洲ノ大國ニ其地大ニ
 推テ其地極遠南亞利加洲ノ大國ニ其地大ニ
 小此等ナリ



図8 『訂正四十二国人物図説』のブラジルの人 (山村：1801より)

南亞利加洲ノ南水コトヲ總括シテアノルニカコトニテ種々ナリ其
 人皆シラシテ強暴野蠻ノ理教ヲ知ラズ歐羅巴ノ人未タ此地ヲ開テ州縣
 フ置クテ其地極遠南亞利加洲ノ大國ニ其地大ニ
 形最異ナリ風俗モ亦極テ野蠻ナリト云
 其人コト又名加國地方殿冷人長ニ文許 通体皆七好并テ矢矢長六人每種一
 矢并八口ニ至没羽以赤骨男サ取五七高面烏文飾皆堪地得人齒
 深三指矢四指餘蓋昔時人更長云



図9 『訂正四十二国人物図説』のバタゴニアの長人 (山村：1801より)

いることになる。同様の捉え方は、以下に示すブラジルの記述および『訂正増訳采覧異言』の中のアメリカ地域の記述にも認められる²²⁾。

一方、ブラジルの図は「世界図」と同質の構図で、ナイフを手にした男性と人肉をねだる子供が描かれている²³⁾。この図には、「……その人種類一にあらず。多く、強暴無類にして、君長、文物、法度なく、ただ魔を祭り、人を殺して食うことを好む。今は、ポルトガル国より、その海辺2千里を併せ有ち、14ヶ処に守令を置く。これを治め、諸部を放心し、その人次第に理義を辨知するもの多し」と説明されており、民族の多様性、カニバリズムの慣習、未開・野蛮性が示されていると同時に、ポルトガルの統治により、人々が理性をもつようになったと述べられている。パタゴニアは、やはり他より大きく描かれている。説明をみると、「……強暴野卑にして、理義を知らず。欧羅巴の人、未だこの地を開て、州県を置くことなし。あるいは好んで人を食うあり。……その人みな、身材、甚だ長大にして、その足最異なり。風俗もまた極めて野卑なりと云う」とあり、化物の記述を否定しながら刊行されたはずの巻物から、パタゴニアの巨人が消えていない²⁴⁾。それどころか、前時代までの長人に関する情報に食人の慣習が加えられている。

才助は、この民族図の訂正版を出した翌年、計125種もの書物を参考にし、前述した白石の『采覧異言』を大幅に加筆・修正した『訂正増訳采覧異言』を著す。冒頭の部分において、「南亜墨利加洲諸国」として、ブラジル、マゼラン海峡周辺域、チリ、ペルー、カステイーリャ・デ・オーロ、アマゾン、パラグアイが挙げられており、その「属洲」も含めて、計12地域の記述を「卷之十一」で行っている²⁵⁾。

記述の内容は、驚くほど詳細さを増しており、アメリカ全般について述べている部分では、「閩龍」(コロンブス)や「亜墨利哥」(アメリゴ・ヴェスプッチ)による「発見」に関しても述べられている。さらに「……その土人色あるいは白あるいは黒、種類一ならず。しかして、その人俗みな多くは善良。これ古は邪魔を崇信せしが、近世以来エウロッパの特化に

懐^{なつ}きて風俗一変せる者なり。然れども、その他なおいまだ開けざるの地には、あるいは今に至っても邪魔妖信に迷えるあり。あるいは絶て神鬼あることを知らず、またその制度法教などもなき者あり。しかして、エウロッパより次第に教え施し……」(山村1979:1101-1102)とあり、前述した意味合いにおいて、「邪魔妖信」という表現、さらにはそうした悪の信仰をしていた人々がヨーロッパのおかげで善良になったとしている点から、ヨーロッパ中心主義的思考の移行をみてとれる。刊年を考慮すれば、「善良である」という表現の背景に、ルソー以後隆盛をみる「高貴なる野蛮人」観の影響を考えてもよいだろう²⁶⁾。

個々の地域に関する記録の中から、まずブラジルの項目をみると、前時代までと同様の怪異に満ちた内容を維持しながら、詳細な記述がなされている。たとえば、「……又、その内地に居る者また数部あり。いわゆるマルガヤテン、タバヤテン、オヘタカテン、トホピナン(また云う。トピナンボウス)、バウルテン、モルピオンスなどなり。その俗殊異にして、性、極めて強暴野卑。好んで人肉を食う。男女みな裸体にして鳥毛をもってその首を飾り、また唇^{かん}頬に孔を穿ち、玉石骨角の類を嵌^{おそ}す。その状甚だ怕るべし。……」(山村1979:1108)とし、トゥピナンバをはじめとする諸部族の名称を挙げ、これらに恐怖の念を抱いている。

パタゴニアに関しては、これまでに述べた情報を集成しているほか、ティエラ・デル・フエゴにも言及して「……その地形人物詳にせず。…土人は、性みな極めて廉暴野卑にして、理義を解せず。鬼神を知らず。また、法教なし。平居^{ただ}惟鬪争を事とす。その人、色白しと雖も、恒に脂^{つね あぶら}をもって、その面および身に塗て、赤色ならしむと云う。」(山村1979:1125-1126)と述べており、他のアメリカ先住民と同質の理解がなされている。一方、ペルーに関しては、「此国西語『ペリュウ』本名『トバンチスヒオ』と云う」と、インカ帝国の自称(タワンティン・スーユ)にまで言及している。さらに、世界で最も金銀を産出するために非常に豊かであるとし、この具体事例として、スペイン人によるインカ第13代王アタワルパの幽閉と金銀

の獲得に関する逸話が述べられている（山村1979：1133-1135）。また、ペルーとブラジルの間におかれているアマゾンの国については、「……高山の中に、所居の一種の婦人ありて、^{はなはだ}甚勇猛なり。その俗、^{はなは}酷だ、古のアマゾオネンに似たり……」と記し、この後にギリシャ神話のアマゾンの話を詳細に引用している。さらに、「他方の人、その地に至れば、即ち弓をもってこれを射る。ただ、毎歳一たび山を下りて他方の男子を迎えて、合歓を求む」と、アマゾン川の発見者であるフランシスコ・デ・オレリャーナの探検に同行したカルバハルの記録が多分に影響した内容を記し、こうした習慣が古代のアマゾンの人々と似ているため、「アマゾオネン」と称されるとしている。また、「……時として、奇異非常なる珍宝を得ることありと。……」とも述べており、ヨーロッパの人々と同様に、アマゾンの地を富と関連づけてもいる²⁷⁾（以上、山村1979：1156-1160）。

東洋西洋を問わず、豊富な書物の翻訳を基盤として著された才助の著作をみると、機械的に翻訳するのではなく、資料を比較検討しながら、正しい理解を求めている意識が明瞭に窺われる。

Ⅶ 固定化していくイメージ

19世紀をむかえる頃、日本人で偶然に世界周航をし、南アメリカに寄航した者まで現れる。現在の宮城県石巻の水夫で津田夫という人物をはじめとする16人の水夫は、1793年に米を積んだ船で江戸に向かう途中に漂流し、ロシア人に助けられて、その後10人がシベリア経由でレニングラードへ連れていかれ、アレクサンドロ1世に謁見した。16人の内、3人は死亡して9人がロシアに残り、津田夫、儀平、左平、太十郎の4人が、コペンハーゲン、イギリス、カナリヤ諸島を通して大西洋を渡り、ブラジル、ホーン岬を経て太平洋に出、マルケサス島を経て、漂流した年から11年後の1804年に長崎に戻り、期せずして日本人初の世界周航者となったのである。1806年、伊達周宗の命により、蘭学者の大槻玄沢と志村弘強が、死亡した太十郎を除く3人に対して、見聞してきたことの調書を取り、それをまと

めて『環海異聞』(1807)が成立している。

この書物の中に記されたブラジル情報は僅少であるが、肌の色が薄黒かったこと、髪の毛が縮れていたこと、暑いこと、ココナツの実やバナナを食べたこと、ワニを見たことなどが記されている。当時の水夫であった津田夫らは、蘭学者と同レベルに、系統立てて自分たちが見聞してきた内容を伝えられていない。『環海異聞』を見ると、水夫たちの情報によって、蘭学者の知識が付加・修正されていく状況もみてとれるが、それよりも既存の知識の中で、提示された情報を確認していくという傾向が認められる。たとえば、水夫たちが、「殻が非常に堅く、…内に肉油がいっぱい入っている」もの(ヤシの実)の液を飲んで暑さが安らいだと述べている部分で、大槻玄沢は次のように記している(大槻・志村1989:228)。「その名を問うたが忘れたという。…暖国であるから椰子であろうかと思ったので、コツコスとはいわなかったかと問うたところ、津田夫は手を打っていう。貴殿の質問によって思い出しました。向こうの人はコツコス(cocos)と呼んでいました。…」²⁸⁾。こうした状況は、識者の間で、アメリカ地域はもちろん、世界の諸地域に関する固定的観念が、前時代までの流れを受けながら、すでに構築されつつあったことを示している。

VIII 社会に流出した怪しいアメリカ

明治維新を間近にひかえた幕末になると、地理学も大きく進展し、科学的思考に基づいた地図が製作されていき、そこには食人国も長人国も記されていない。しかしその一方で、これまでみてきたような怪しげなアメリカイメージを伴う地図や民族図も製作され続けている。しかもそれらは、一般の人々に向けて製作されたもので、こうしたイメージが社会に流出していった状況を見て取ることができる。

たとえば、19世紀の半ばに製作された『蒙古退治万国早分図』と題された地図をみると、南アメリカ大陸の西側に長人の図が表されており、「身の丈、一丈余り、8500里」と、身長と日本からの距離が注記されている²⁹⁾。

また地図の右隅には、「南北アメリカは、大国にして、1600余州有り。この地人物は、余国より大きく、色白くして、至って美なり。男子は、^{ことごと}悉く体に彫り物をするなり。模様は唐草または龍の類多し。南へよるほど、人物大きく南アメリカの果てに大人国あり」と記されており、これまで蓄積されてきた情報を基盤として、当時の日本あるいは東洋的要素を組み込んだ発明が加えられている³⁰⁾。

パタゴニアの長人を示す図は、『外番容貌図画』（1854）という、挿し絵入りの世界地誌にも描かれている（図10）。この図には、人物が卑しく、獣の毛皮を纏っていることが説明されている。同時期に製作された一般向けの地図類をみると、ブラジルの食人や黄金郷は消失し、パタゴニアの長人だけが継続して示されている³¹⁾。さらに同情報は、1840年頃の伊万里焼の皿に文様として付された地図中にも認められ、焼き物の絵付け師にも「長人国」の知識が普及していたことがわかる（図11）。

19世紀半ばには、各国の名称や人口を、相撲の番付表スタイルで示した『万国一覽』も製作されている（図12）。番付である以上、世界の国・地域の優劣が思考されていたことを示すものとして注目される。行司はオランダ、年寄り清（中国）と示されている中央部分には、「上は、強弱を以て位を分ち、次は人口多寡を以てし、又次は其名を挙るのみ」と説明されているものの、その「強弱」が何を基準に定められたのかは不明瞭である。ラテンアメリカ関係では、メキシコとブラジルが前頭の上に位置づけられているほかは、低い番付に位置づけられている³²⁾。

1868年（慶応4、明治元年）には『万国渡海双六』という、世界の国々をめぐる双六が製作されている。この双六には、世界の国名、都市名、港、島、湖など計98の名称が挙げられており、日本を出航して諸地域を通り、再び日本に帰港して上がりとなるように設定されている。タイトル部分には、「異国の名高き都、名所、島々、港々の名を女、わらべも知りやすく」と記されており、一般の人々の間にも世界の情報が身近なものとなっていた状況がわかる。この双六の中の「祈多」（キト）には、三人の人間

が、羽毛を纏っただけの裸体の状態で示されている（図13）。

IX おわりに

以上、ヨーロッパとの接触がはじまる16世紀から幕末にいたるまで、日本における南アメリカ認識・イメージの流れを概観してきた。この結果、対象と直面することなく、300年あまりの間に南アメリカ観が徐々に熟成され、同地域と直接的接触がなされる以前に、固定的観念・イメージを構築していた状況がまず明らかとなった。いうまでもなく、他者観あるいは異文化観は、文化というフィルターを経て構築されるものである。当時の日本において形成された南アメリカ観も、ヨーロッパを通して得た情報がそのまま移行したわけではない。得られた情報を基盤として、新井白石の長人論に代表されるように、それぞれの時代の知識、社会状況、伝統的観念、基本的論理性などをもって、同地域の理解を進めていたことが随所にみとれる。しかし、その情報が南アメリカの情報であると同時に、ヨーロッパにおける南アメリカ観の情報であったこと、そしてその情報を否定的に判断し得る材料が欠如していたことなどにより、日本において形成された南アメリカ観も、ヨーロッパにおける南アメリカ（他者）観の枠組みを逸脱するものではあり得なかった。

示された情報を見ると、初期段階から19世紀初頭にいたるまでは、ペルーからブラジルへのハンモック利用の移行、長人の特徴の増幅など、多少の変化は認められるものの、これらがいずれも異様あるいは怪異という枠組みの中に収まるものであるという意味において、同質のアメリカ観が継承されていると考えてよいであろう。しかし、山村才助以後、パタゴニアは継続して表象されるのに対し、ブラジルの食人や黄金郷に関わる情報が消失してしまう。この変化の要因は、現段階において明瞭になっていない。年代的にはラテンアメリカ諸国の独立の時期に相当しており、示唆的ではあるが、同様の変遷はヨーロッパにおいて認められないため、日本の状況もさらに考察されるべきであろう。

他者観の情報移入に伴い、必然的に、ヨーロッパ中心主義的思考が意識されることなく日本人の中に浸透・蔓延していった痕跡も明瞭にみてとれよう。キリスト教の論理からすれば、「偶像崇拝者」であるはずの日本人が、南アメリカ地域における偶像崇拝を批判的に表現し、ヨーロッパの人々によって同地域の先住民が改善しつつあると考えていることは、その痕跡を明瞭に示す事例の一つである。こうした状況は、近代化以前に、ヨーロッパ的思考のもとで近代化に向かうための基盤が、すでに構築された状態にあったことを示している。世界を経巡る航海技術、言い換えれば世界を網羅する情報伝達手段を唯一有していたのがヨーロッパ諸国であったのだから、近代化以前におけるヨーロッパ中心主義的思考の浸透・蔓延は、おそらく日本に限定されたものではあるまい。

本論では、幕末までにみられる南アメリカ情報の流れを追うことによって、同地域の認識をめぐる諸特徴を示すに留まったが、明治維新以後の状況、両地域間におけるイメージの作用、さらには本論では検証が不十分であったアメリカ情報として示された諸要素の日本文化・思考体系内における位置づけなど、今後考察を加えていくべき課題が山積している。

謝辞

本稿を提出するにあたり、一橋大学の落合一泰氏に一読していただき、貴重なご教示を賜った。大阪の南蛮文化館には、所蔵品の写真を使用させていただいた。ここに銘記して深謝申し上げます。

注

- 1) 1609年に派遣された慶長使節団がメキシコを経由していること、家康が日本の銀山開発にあたって、50名の技師の派遣をメキシコに要請していることなどが知られている。1613年になされたりマのインディオ人口調査の中で、20人の日本人が算定されている（網野1992：248-249）。
- 2) 代表的な研究として、Chiappelli (1976)、トドロフ (1986)、Mason (1990)、落合 (1993; 1997)、Williams and Lewis (1993)、Haase and Reinhold (1994)、オゴルマン (1999) などがある。
- 3) シュターデンの記録をみると、殺害し、四肢を切断するのが男性で、女性

- と子供が人肉を食べるように記述されている (Staden 1983: 216-218)。ヨーロッパで製作されている版画等でも、この情報が反映されている。「世界図」で性差を意識してカニバリズムの慣習に言及しているのは、こうした状況が影響しているものと考えられる (大平1996: 31-33)。
- 4) この湖に、「ぱりめらくし」(Parime Lago) すなわちパリマ湖と名称を付している「世界図」もあり、両方の湖が黄金郷と関連づけられていたものと考えられる。なおヨーロッパにおいて、湖は黄金郷のメルクマールであったことが指摘されている (Sánchez 1993: 354)。
 - 5) この情報は、アマゾン低地やカリブ諸島などで広く認められる擬婉の慣習が反映されたものと考えられるが、当時の日本人がその意味合いを理解していた痕跡は認められない。
 - 6) また当初の「万国総図」刊行には、測量術、航海術などの学習を修めた、いわば資格を証明する目的もあった。しかし、こうした役割は、1646年以後に急速に衰え、一般的刊行がなされるようになったと考えられている (海野 1985: 273-285; 1989: 25-32, 50)。
 - 7) 影響を受けた地図類として、石川俊介 (流宣) の『万国総界図』の他、『万国人物ノ総図』(横浜市立大学図書館所蔵)、『世界万国総図』(神戸市立博物館所蔵)などが知られている。これらにも、同質のアメリカ情報が示されている。民族図の引用は、辞書兼百科便覧である節用集にも認められ、17世紀末から19世紀にかけて広く流布した (秋岡1934: 35-37)。
 - 8) この図に関しては、織田・室賀・海野 (1975: 46解説第57図) を参照。
 - 9) たとえば食人鬼の話が『日本霊異記』の中で述べられている。しかし、食人と薬の関係も認められるため (吉岡1992)、さらなる検討を要する。
 - 10) また、こうした特徴は、落合 (1997: 143-149) によって論じられている、中世ヨーロッパにおいて成立し、ヨーロッパにおけるアメリカ認識にも多大な影響を及ぼした「ワイルド・マン」伝統の両義的特徴 (ヨーロッパの自然観から表出される野蛮と無垢) とも一致する。なお、バリヤドリ論争とは、16世紀半ば、アリストテレス哲学を基盤として、「野蛮な」慣習に満ちたインディオを悪あるいは劣等とするセプルベダと、逆に、無垢な子供のような状態と捉えて擁護したラス・カサス神父の間に展開された征服戦争の是非をめぐる論争。後者と同質の思考は、18世紀半ばに出版されたルソーの著作以後、「高貴なる野蛮人」観として隆盛をみる。
 - 11) 日本におけるミイラの輸入は、1648年には始まっており、延宝期 (1673-81) に大流行して一般の人々も薬として使用していたことが知られている。18世紀半ばには徳川吉宗や家重など、将軍も買い求めており、その輸入は19世紀にいたっても継続した (山脇1995: 158-172)。

- 12) 全身に毛が生えているという情報は、注10で述べた「ワイルド・マン」の特徴（落合1997：143-154）と合致するものである。
- 13) こうした世界観に関しては、オゴルマン（1999：75-85）を参照。
- 14) 西川（1944：171）。なお、参考書物としては、当時禁書令の中に含まれていた、イタリア人の宣教師ジュリオ・アレニ（Giulio Aleni）による『職方外紀』（1623）、また『諸国土産書』などが知られている。
- 15) 両書物の関係に関しては、宮崎（1988：359-364）を参照。なお白石が使用したリッチとブラウの地図は、現在東京国立博物館に所蔵されており、前者には白石自身が記した15枚の付箋が付随している。
- 16) 当時の知識においても、ニカラグア以下の諸地域は北米の項目中で扱われるべきものである。なお、北米の中で扱われているメキシコの記述では、当時のメキシコと日本の関係が詳述されている（新井1906：852）。
- 17) 白石は、幕政の中で、経済の立て直しにも携わっており、1714年（正徳4年）から良質の「正徳金銀」の鑄造をはじめている。しかし、金銀が不足していたため、その立て直しは失敗に終わっている。
- 18) 『啁蘭新訳地球全図』に関しては織田・室賀・海野（1975：82図）参照。
- 19) 民族図中で、ブラジルが右下に位置し、アメリカはその上に描かれている（図5）。なお同書には、長人国と称される理由、アメリカ地域の動物とバルサムに関する若干の記述も認められる（新井1968：354-355）。
- 20) 前者は、早稲田大学図書館に所蔵されている。この他の才助の著書では、『外記西語考』（1796）にアメリカ地域の地名、河川名が挙げられているほか、世界の奇談を集めた『西洋雑記』（1801）にも、同地域の奇抜な動物に関する記述が認められる。
- 21) 『訂正四十二国人物図説』の中には、初期段階から民族図の中で「アメリカ」として描かれてきた図も認められるが、これはインド東南に位置する島の民族として扱われている。
- 22) 『増補華夷通商考』におけるメキシコの記述でも、「魔神を祭れり」と記されており（西川1944：187）、たとえ翻訳あるいは翻訳書を基盤とした情報にしる、こうした理解・捉え方が、遅くとも17世紀末にはなされていたことが明らかである。
- 23) この図は、出光美術館所蔵の「世界図」に付随した「ブラジル」の図と同質のものである。同図の解釈については、大平（1996：33）を参照。
- 24) 才助の説明に続き、大槻玄沢自身も自筆で説明書きを加えている。
- 25) これらは、ブラジル、パタゴニア、チリ、ペルー、カステイリーヤ・デ・オーロ、ポパヤン、カラカス、ギアナ、ヌエバ・アンダルシア、アマゾン、パラグアイである。しかし「巻之十一」には、冒頭部分でノオルトアメリカ

- (北アメリカ)の諸国とし、本来「巻之十二」で記述されるべき、ニカラグア、ホンデュラス、ユカタンの記述もなされている。
- 26) 注10参照。
- 27) ヨーロッパにおいて創作されてきたアマゾンの逸話は、すべて黄金と関連して語られていることから、エル・ドラード伝説の一部と考えられている(Sánchez 1993: 348-352)。
- 28) 大槻玄沢はヤシの研究にも携わっており、その研究書も執筆している。また、ワニの情報を含む書物も残しているため、ワニをめぐる調書の中でも、同質の思考をもって臨んでいる。
- 29) この図に関しては、織田・室賀・海野(1975: 112図)を参照。
- 30) 19世紀半ばにおいて、栄寿堂から出版されている『万国人物之図』にも、これと同様の説明書きが加えられている。この図については、織田・室賀・海野(1975: 113図)を参照。
- 31) たとえば、『世界六大州』、『地球万国全図』、『地球万国山海輿地全図説』、『地球万国全図説覧』、『早智万国之図』などがある。これらに関しては、織田・室賀・海野(1975: 104図, 108図, 111図, 115図)を参照。
- 32) 同様の図として、同時期に浮世絵師が製作した『万国地名競』がある。この表は、人口ではなく距離が記されているが、番付は距離に依拠して定められておらず、上位に南アメリカ関係の地名は認められない。この図に関しては、織田・室賀・海野(1975: 解説第105図)を参照。

文献リスト

- 秋岡武次郎. 1934. 『地図学史』岩波書店。
- 網野徹哉. 1992. 「インディオ・スペイン人・『インカ』」(歴史学研究会編『「他者」との遭遇』南北アメリカの500年第1巻、青木書店)、248-279ページ。
- 新井白石. 1906. 『新井白石全集』第四巻、国立国会図書館。
- . 1968. 『新訂西洋紀聞』東洋文庫113、平凡社。
- 海野一隆. 1985. 『ちずのしわ』雄松堂出版。
- . 1989. 「正保刊『万国総図』の成立と流布」(有坂隆道編『日本洋学史の研究』X、創元社)、9-75ページ。
- 大平秀一. 1995. 「出光美術館所蔵の南蛮系世界図屏風にみられる南アメリカー異文化認識の理解に向けて」(『出光美術館研究紀要』第1号)、13-33ページ。
- . 1996. 「日本における南アメリカ認識の原初形態—南蛮系世界図にみられる諸情報をめぐって」(『出光美術館研究紀要』第2号)、13-48ページ。
- 大槻玄沢・志村弘強編. 1989. 『環海異聞』池田裕皓訳、海外渡航記叢書2、雄

松堂出版。

- オゴルマン, E. 1999. 『アメリカは発明された—イメージとしての1492年』 青木芳夫訳、日本経済評論社。原著 Edmundo O'Gorman, *La Invención de America. Investigación acerca de la estructura histórica del Nuevo Mundo y del sentido de su devenir* (México : Cultura SEP).
- 落合一泰. 1993. 「アメリカの発明」(『ラテンアメリカ研究年報』No.13)、1—40ページ。
- . 1997. 「東方の驚異、ワイルド・マン、インディアン、グリーザー—近代西欧<民族人類学>によるアメリカ大陸の<占有>—」(青木保他編『新たな人間の発見』岩波講座文化人類学第1巻、岩波書店)、141—180ページ。
- 織田武雄・室賀信夫・海野一隆編. 1975. 『日本古地図大成世界図編』講談社。
- トドロフ, T. 1986. 『他者の記号学—アメリカ大陸の征服』及川馥・大谷尚文・菊地良夫訳、法政大学出版局
- 西川如見. 1944. 『日本水土考・水土解弁・増補華夷通商考』岩波書店。
- 宮崎道生. 1988. 『新井白石の史学と地理学』吉川弘文館。
- 山村才助. 1801. 『訂正四十二国人物図説』(早大図書館所蔵)
- . 1979. 『訂正増訳采覧異言』上下、青史社。
- 山脇悌二郎. 1995. 『近世日本の医薬文化—ミイラ・アヘン・コーヒー』平凡社。
- 吉岡郁夫. 1992. 「医療としての食人—日本と中国の比較」(比較民俗研究5) 22—35ページ。
- Chiappelli, Fredi (ed.). 1976. *First Images of America : The Impact of the New World on the Old*. vol. I, II, (Berkeley : University of California Press).
- Haase, Wolfgang and Meyer Reinhold (eds.). 1994. *The Classical Tradition and The Americas : European Images of the Americas and the Classical Tradition* (New York : Walter de Gruyter).
- Mason, Peter. 1990. *Deconstructing America. Representation of the Other* (London : Routledge).
- Raleigh, Walter, K. 1898. *The Discovery of the Large, Rich, and Beautiful Empire of Guiana* (London : The Hakluyt Society, First Series. No. 3.).
- Sanchez, Jean-Pierre. 1993. “«El Dorado» and the Myth of the Golden Fleece”, in Wolfgang Haase and Meyer Reinhold (eds.), *The Classical Tradition and The Americas* (New York : Walter de Gruyter), vol. 1, pp. 339–378.
- Staden, Hans. 1983. *Verdadera Historia y Descripción de un Pais de Salvajes Desnudos*, . trans. by Juan Azpitarte (Barcelona : Argos Vergara).
- Williams, J. M. and Robert E. Lewis (eds.). 1993. *Early Images of the Americas :*

Transfer and Invention (Tucson : University of Arizona Press).

〈Resumen〉

La historia de la cognición japonesa sobre América Latina : desde el siglo XVI a 1863.

Shuichi ODAIRA

Hasta ahora se han presentado varios trabajos sobre el tema de la cognición de América. En general estos han significado el estudio de la cognición europea sobre América, como resultado de la relación directa de los países que la “descubrieron” y colonizaron. El presente trabajo tratará sobre la cognición japonesa de América Latina antes de establecerse una relación directa.

El primer contacto de Japón con el mundo europeo fue alrededor del año 1540', probablemente de forma simultánea se comenzó a tener conocimiento sobre América. La primera información de América presentada en Japón, se puede observar en dibujos de mapas mundi pintados sobre biombos por japoneses alrededor de 1590-1640, los mismos que contienen las figuras de etnias americanas. En éste se representan algunas características típicas de la cognición europea sobre América ; como la riqueza anormal (nombres y lagunas relacionadas a las leyendas de “El Dorado”), los tabúes (canibalismo en Brasil), y sobre monstruos (existencia de gigantes en la Patagonia), etc. Aspectos que continúan representándose en mapas hechos por japoneses después de 1645.

A finales del siglo XVII, NISHIKAWA Joken y ARAI Hakuseki publican algunos libros de geografía del mundo, en los cuales incluyen una parte del área de América. Al examinarse algunas descripciones de este libro es claro que los japoneses de esa época aún miraban a América como los europeos.

Al comienzo del siglo XIX, YAMAMURA Saisuke escribió igualmente un tipo de

libro similar. En éste, la información sobre América es bastante detallada, sin embargo el carácter de su contenido es bastante similar a los anteriores.

Después de YAMAMURA desaparecieron las informaciones del canibalismo en Brasil y “El Dorado”, y aún continúan con el tipo de representaciones de gigantes de la Patagonia. En este momento no es clara la causa de este cambio. Sin embargo, se nota que éste no es paralelo a la europea, y tenemos que analizar más la situación del Japón.

A través de este trabajo se señala que en Japón, en el lapso de 300 años, antes de establecerse el contacto directo con el continente sudamericano, se formaron imágenes fijadas sobre América sin encontrar al objeto de la cognición. Claro que para llegar a este conocimiento fue necesario pasar por el filtro de la interpretación de la cultura. Igualmente, los japoneses, en este período también lo interpretaron a través de su propio filtro cultural. Sin embargo, la información acumulada no fue solo la de América sino que también fue la de la cognición europea sobre América. Por lo tanto la forma de la imagen no ha cambiado mucho.

En el libro escrito por YAMAMURA, autor, que fue idólatra de la teoría del cristianismo, ha escrito críticamente sobre la idolatría de los nativos americanos, y dice “están normalizados los nativos gracias al control europeo”. Este ejemplo muestra que la importación de la cognición sobre América acompañó al pensamiento euro céntrico, y lo penetró inconscientemente al pensamiento japonés. Podemos interpretar esta situación como la base para caminar hacia la época moderna, que ya estuvo lista antes de entrar a este nuevo período . Es posible que esta situación fuera mundial, ya que la línea europea fue la única forma de trasmisión de las relaciones culturales .